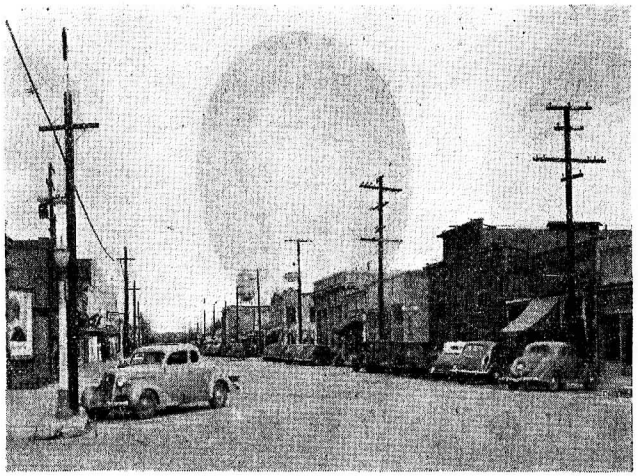
第七章　ダイニューバ支部



ダイニューバ市

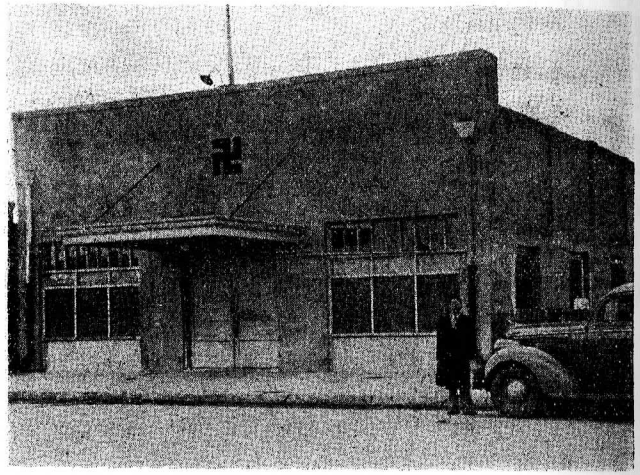
ダイニューバ小觀

サウザン・パシフキック鐵道會社が、其の鐵路を、シエラ、ネバタの山麓たる、サンオーキン平原一帶に敷設し、平原開發上の運輸を計つて以來、ダイニューバは斷然頭角を現し、現在の基礎を築くに至つたものである。同市は、サンオーキン平原の中心點たるフレスノより、南東約四十哩あり、隣市リードレーを距てること七哩、東南バイセリア市に二十二哩あり、人口三千五百を有し、アルタ給水地域の中央位置にあつて附近十二萬英町の農園を潤し、其の給水堤溝の延長、實に三百五十哩に及び、農產物の主なる物は、葡萄、果樹、牛乳業、野菜等にして、一九三五年度の產額は約八百萬弗に達し、葡萄その主位を占めて四百萬弗、ディリー之れに次いで壹百萬弗、林檎類約六十五萬弗に上る。

ダイニューバ市の、最も殷盛を極めたのは、今より約二十年前頃であつたが、歐洲戰後の經濟的パニックを受けて以來、漸年農產業不振に陷り、隨つて市況も振はず、發展と言ふよりも、寧ろ衰微を感ぜしむるものがある。歐洲大戰當時の、同市に於ける在留邦人社會は、實に物凄い盛況を呈し、殊に收穫期

頃の殷賑さは他に之れを求むべくもなかつたと傳へられて居る。此地に日本人が最初入つたのは廣島縣人宮地喜太郎で、それに次いで明治三十五年三月（一九〇二年）廣島縣人前田寛太郎、中村喜代三等が移住し、その後二年目頃より、急に發達し來て居る。

現在同市を中心としてオロサ、ソルタナ、オレンヂコープ、カトラ、エテム地方に在留する邦人の戸數は約八十五戸に及び、老若※



支部會館と前に立てる筆者

に中村藤吉劍道教士一行が來市し、華々しく劍道の講習を開始することになつたので、師範荒木の快諾賛成を得て、小

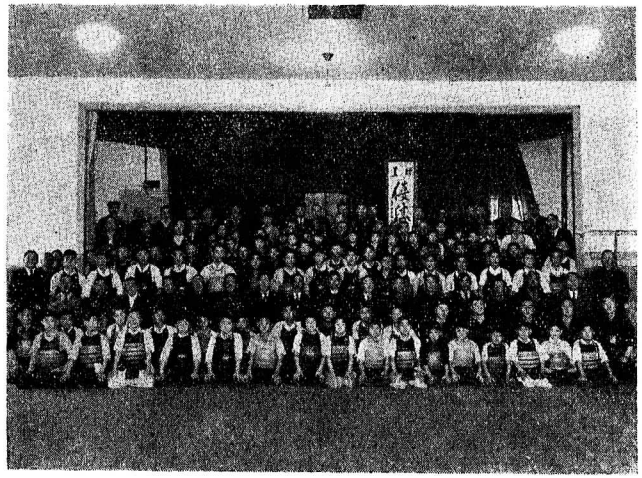
※男女合して五百名に達し、之等が大同團結して佛教會、附屬學園、佛青、ダイニューバ青年會、南美以教會、附屬學園、北米武德會支部等の各團體を維持經營して居る。

初めて劍道の講習受く

ダイニューバに於ける劍道の歷史は、可なり古いものがあり、最初は同地青年會に於て少數の青年同好者等が、數組の道具を設備して、相互教授的に劍道をやつて居た。恰も其の頃、同地學園教師として赴任し來た熊本出身の荒木政雄が、其の道の使ひ手である處から、同人に乞ふて劍道の教授を受くるに至つたのが、同地に於ける劍道の濫觴であり、北米武德會支部設立の發端となつたのである。

荒木政雄の獻身的努力に依つて、青少年が漸く竹刀の握り方を修得した折柄、一九三二年の五月末、隣市リードレ

田數馬、岡崎倉三、小山丈藏、片山明治、芝光三郎、福島群一、古賀興三郎、山田延吉、川野才吉、渡邊政治、小田泉等が音頭取りとなり、ダイニューバ、オロサ兩地より四十數名の男女を勸誘してリードレーに押しかけ、中村敎士の劍道講習を受くるに至り、其後同地よりリードレー道場に通ひ、毎週一回の稽古を受くることになつた。



支部及び劍士兄父同一

分館より支部獨立

リードレーに於ける講習後は、七哩の道を遠しとせず、毎週一回父兄等は、劍士を送迎してゐたのであるが、種々の不便を生じ、また他面には、之れを繼續發展せしめんとすれば、寧ろ當地に分館を設立して、一週一回師範を招聘した方が宜くはないか？　との議が擡頭した結果、小田數馬、岡崎倉三、小山丈藏、片山明治、芝吉三郎、福島群一、古賀興三郎、山田延吉、川野才吉、渡邊政治、小田泉等の前記世話役等を筆頭に、辻虎藏、川崎新太郎、國武繁男、山本村吉、永田佐市、篠田九藏、笹野胖、中田繁夫、横山智、小林傳、松島源司、才田民太郎、西川喜三郎、水木忠二十五名の委員を擧げて、分館設立の議を練り、遂に一九三二年の暮、之れが決定を見るに至つた。

翌一九三三年一月廿三日、佛敎會ホールに於て劍道分館の總會を開催し、出席者十六名、岡崎倉三議長となつて、左の

議事を決定すると同時に、前年度の役員を改選した。

決議事項

一、道場の經營方法は現狀維持たる事

一、稽古は來る二月十七日（金）より開始の事

一、會費は一ケ年壹弗とす

役員選擧

△理事　小田數馬、岡崎倉三

△委員　ダイニューバ地方福島群一、川野才吉、古賀興三郎、オロサ地方辻虎藏、片山明治、山田延吉

△幹事　小田泉　△會計小山丈藏

斯くて劍道分館も成立し、劍士の數も徐々と增加し來り、父兄等も大に熱を擧げて極力之れを應援支持して居たが、分館の事業が隆盛になるに從ひ、父兄間に澎湃として支部設立の議が湧き上り、集會毎に此の問題が中心となつて來た處から、理事及び地方委員等は、リードレー支部當局者とも屢々會合を持ち、了解を得て遂にその年、正式にダイニューバ支部の設立を實現するに至り、左の規定を設けて、新役員の顏觸れを見た。

ダイニューバ支部規則

第一條　本支部を北米武德會ダイニューバ支部と稱し、道場及び會議所を當市に置く。

第二條　本支部の設立は在住青年子弟をして日本固有の武德精神を涵養せしむると同時に、心身の淨化鍛錬を以て目的とす。

第三條　本支部の維持經營は、會費一年一弗とし、其他は保護者及び特志家の寄附を以て實施す。

第四條　講習生の進退其他處置は、道場師範の權利に依托す。同時に講習生の心得もまた、師範者の定むる所に依るものとす。

第五條　本支部經營に關する一切の規定は毎年一月の定期總會に於て適宜變更する事とす。

第六條　本支部に支部會長一名、會計一名、幹事一名を置くも、右役員の數は、總會を俟たずとも、役員會の決議に依つて、適宜增減することあり。

役員選擧（一九三三年度）

支部長　小田數馬　　會計　小山丈藏

幹事　渡邊政治

一九三四年同上

一九三五年同上

一九三六年同上

一九三七年度役員

支部長　福島群一　　副支部長　朝田藻唉

會計　小山丈藏　　監査　尾崎儀一郎

監査　西田讓　　幹事　渡邊政治

顧問　小田數馬

師範　小田泉　同　福島群一

助手　相原辰雄　同　渡邊政男

本支部の功勞者

一九三二年の劍道講習會當時より、一九三六年度まで、精神的にも物質的にも多大な貢獻する處があり、四ケ年間支部會長の責任ある職に就き、會の發展に盡瘁した小田數馬の功勞は實に偉大なるものがあり、三七年度の改員改選に當つて支部は之れを多とし表彰するに至つた。此の外創立當時より今日まで、武道精神を善く理解し、二世の劍道修練を單なる花火線香に終らしめず、益々之れが發展に盡せる父兄は、オロサ辻虎藏、ダイニューバ福島群一、渡邊政治、小田泉、小山丈藏、故古賀興三郎妻リン等である。更らにまた、之等熱心な父兄に動かされて、吾子を入門せしめし父兄等は、朝田藻唉、尾崎儀一郎、西田讓、北内伊之吉、久保等、山本吉五郎、相原嘉藏、山本村吉等で皆な善く二世の劍道修練に盡しつゝある。現在の劍士數は約三十名あり、その中より有段者二段小田泉、福島一、初段相原辰雄、渡邊政男の四名を輩出し、渡邊政男は現在日本の皇道學院に語學を學ぶ傍ら、劍道の修業中である。

ダイニューバ支部會長　福島群一

明治十九年一月、廣島縣安佐郡久地村に生る。同三十六年、東亞の風雲險惡なる時、年齡漸く十七歳を以て布哇に渡り同島に就働三年後の、一九〇六年一月大陸に轉航、桑港に上陸するや直ちに現住所に親戚前田寛次郎を訪ね、翌一九〇七年より前田と共同にて葡萄園を經營、孜々精勵の結果一九一一年には共同にて二十英町の葡萄園を購入し、一九一三年

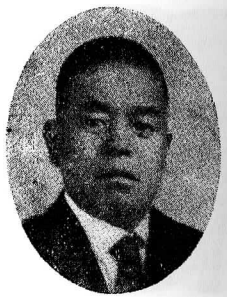
之れを資本金二萬弗の株式組織に改め、同一八年には拾六萬弗の資本金に增額してバイランド株式會社を創立し、三百英町の農園を購入するに至る。現在共同者前田寛次郎と共に約三百五十英町の土地を所有するの外、二百英町の蔬菜を栽培今日に至る。資性實に溫厚篤實にして、共同者前田寛次郎の四隣に響く德望と共に名聲あり。また公共事業に貢獻する所多く北米武德會支部長として盡瘁する傍ら、他の諸團體に盡せり。妻カメまた內助の功あり、夫婦の仲に長男一、二男秋雄、三男城兒、四男義則、長女好枝、二女高子、三女幸子、四女滋子の四男四女ありて、家庭的にも子福者として惠まれ、長男一は同地ハイスクール卒業後自動車會社に就働し、二男秋雄は、將來父の大農を繼承する爲め加州大學農科專攻中なり。(Rt 1, Box, 363, Dinuba, Cal.,)

ダイニューバ支部顧問　小田數馬

廣島縣安佐郡日浦村の人、明治廿六年に生る。海外渡航熱旺盛なりし明治四十二年八月五日、十七歳を以て渡米し、シャトルに上陸、同地にて牧畜業に從事すること九ケ年。一旦歸國して翌年再渡米し、中加ダイニューバに移住、一九二二年には、葡萄園八十英町を經營し、再來春秋十六年、其間故鄉に錦歸せしことあり益々隆盛に向ひ今日に至る。社會公共に盡すの念厚く、現に佛敎會副部長たるの外、北米武德會ダイニューバ支部顧問として貢獻せり。妻コスミとの仲に一子雄洋(グラマ在學)あり。(Rt 2 Box 327 Dinuba, Cal.,)

ダイニューバ支部副會長　朝田藻咲

島根縣邑智郡田所村に明治十二年生る。年漸く廿一歳にして明治三十三年渡米し間もなく中加フレスノ地方の農場に入りて農園を經營し、一九三三年まで同地に止どまりて刻苦精勵せるも、五年前現住地に好適の土地を二十英町購入して移住し今日に至る。妻タマヨとの仲に一粒種の肇を擧げ劍道を修練せしめ、彼また支部副會長に推されて會の爲め盡瘁せり。(Rt 1, Box 118, Dinuba, Cal.,)



ダイニューバ支部會計　小山丈藏

福岡縣八女郡光友村に明治十二年生る。同三十九年十二月廿八歳にして渡米桑港上陸。ロスアンゼルスに在住すること十ケ年。其間野菜市場を設けて商業に努力したが、一九二二年現住地に移住し農業に轉じて葡萄園八十英町を經營せしも、其後再び商業に戻つて現在ダイニューバー市に魚店を經營す。頗る公共心に富み多忙なる家業の時間を割きて諸團體の發展に盡力し、現に佛敎會及び學園理事として活躍するの外、北米武德會當地支部創立以來會計の重任に在り。家族は妻イソエとの仲に五男二女あり、長女加壽惠はハイスクール卒業後メリスビルの原唯夫初段と結婚、次女サカエ及び次男良治兩名は日本遊學中、長男實、三男三郎、四男義男はグラマーに通學し、外に幼兒淸あり。(342 W. Tulare St, Dinuba, Cal.,)

ダイニューバ支部幹事

渡邊政治

明治二十年、熊本縣上益城郡七瀧村に生る。少年期より海外發展の勇圖に燃え、明治卅七年、若冠十七歳の身を以て布哇に渡り、二ケ年間同島に於て就働し、同三十九年（一九〇六年）大陸に轉航、桑港に上陸するや語學を學ぶ傍ら働き、一九一三年一度鄕里を訪問再渡米後、直ちに現住地に移轉して食料雜貨商を開業し、爾來今日に至る。資性豪快にして義俠に富み、善く他人の面倒を見、また社會公共事業に盡すこと多大なものがあり、殊に劍道には非常な趣味を持ち、支部設立當初より貢献し、續いて支部幹事に推されその發展に盡せり。妻千代壽また良妻にて內助の功多く兩人の仲に辰子（大學在學）政男（日本留學）次男の二男一女あり、家庭的にも大に惠まれり。（P. O Box 27. Dinuba. Cal.,）

ダイニューバ支部理事

辻虎藏

明治十四年、福岡縣築上郡椎田町に生る。同三十三年數へ十九歳の年渡米し、加州各地を轉じて農業に從事すること拾數年、其後一九二二年ダイニューバを去る數哩なる現住所に移轉し、爾來十六年間孜々と精勵今日に至る。劍道に深き理解と趣味を持ち、支部設立當初より善く貢献し、後援父兄中の溢美として名あり。妻スヱとの仲に長男久男、二男ジョウジ、三男實、四男弘、長女ハツヱ、二女光子の四男二女あり。（P. O Box 143, Yettem, Cal.）

ダイニューバ支部理事

尾崎儀一郎

明治十六年、廣島縣廣島市矢賀町に生る。同三十五年、若冠十九歳を以て渡米し、加州各地を轉稼農業に從事せしも、一九二三年現住地に移住し、葡萄園を經營今日に至る。妻トキヨ善く彼に仕へ、良妻として名あり、兩人の仲に長男賢兒、長女初代、壽美代、喜代子、靜子、メリー、アリスの一男六女あり、皆な劍道を學ばしめ、彼また熱心に之れを後援せり。（Rt 1, Box 430, Orosi, Cal.,）

ダイニューバ支部理事

桐原嘉藏

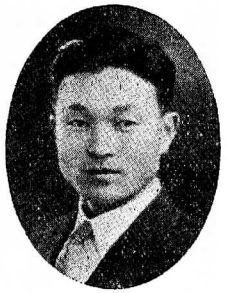
西鄕擧兵の明治十年に熊本縣阿蘇郡錦野村に生る。明治卅二年廿二歳にして海外雄飛の志を抱いて渡布、五年間新しき生活を體驗する所ありしが、一九〇四年日露戰爭の最中に大陸轉航。桑港上陸後南加オクスナード及び河畔地方に於て農業に從事多大の成功を收めしが、其後中加に轉じ一九三五年ダイニューバに移住、現に三十英町の農園を所有し專心經營に當る。家業の傍ら公共事業に盡し支部理事として活躍す。養子辰雄は初段として支部師範代を勤む。（Rt 2 Box 17 Dinuba, Cal.,）

ダイニューバ支部師範二段

小田泉

廣島縣安佐郡日浦村出身の小用茂六の子として一九一一年華州クリストハーに生る。日本精神に依る教育を受くるべく

一九一六年（六歳の年）日本を訪れ父母の郷里にて尋常高等小學校に入學す。同校卒業後歸米し親戚小田數馬を頼り中加ダイニューバに移住、農業に從事して今日に至る。一九三二年中村師範の門に入り只管劍道の修行を志せり。資性俊敏加ふるに弛みなき修行は上達極めて早く一九三七年には二段を允許され、同支部師範として多數劍士の養成指導に當れり。（Rt 2 Box Dinuba, Cal.,）

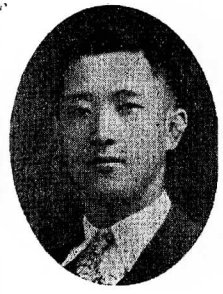


ダイニューバ支部師範代二段　福島一

廣島縣安佐郡久地村出身福島郡一の長男として一九一七年中加ダイニューバ市に生る。幼時より器用にして機械類に趣味を有し、一九三六當市のハイスクールを卒業と共に羅府自動車學校に入學、一九三七年同校卒業と共にダイニューバー市ダッチ會社に技師として入社、日白人間に活動をなす。中村教士に就て劍道を修行し一九三六年春に初段、翌七年には二段を允許され、後進の爲め教授せり。（Rt 1. Box 363 Dinuba, Cal.,）

ダイニューバ支部劍士初段　桐原辰雄

熊本縣阿蘇郡錦野村出身なる桐原嘉藏の養嗣子。一九一四年に布哇ヒロ市に生れ、グラマスクール卒業と共に一九二九年五月大陸に來航す。リードレーハイスクールに入學し、卒業後は養父を助けて農業に精勵す。一九三二年中村劍士に入門し、熱心に劍道の修行を爲せり。俊敏なる資質は着々として劍技進み、一九三七年五月査定に依り初段允許を受く養父嘉藏夫婦に仕へること、實子も及ばざる孝行振りを示し二世の範となりつゝ農事に精勵せり。（Rt 2. Box 17 Dinuba, Cal.,）



第八章　デラノ支部小史

支部設立の端緒

デラノ市は、中加サンオーキン平原の南部にあり、フレスノ市より約七十哩南に位置し、隣市ベーカースフヰルドに約三十哩餘距て、サンオーキン平原中に於ける、歴史の若き小町であるが、約十數年以前より、同胞の多數が移住し、農作物の品種に刷新改造を加へてより急激に發展し、今日の隆盛を齎して居る。在留邦人の數は同市及び近郊を加へて八十數戸なるも、老若男女の數は有に五百を數へ、收獲期に於ては二、三千人の多數に達し、其の殷盛さを物語るに足るものがある。同地に於ける劍道の濫觴は、今より十年前現ウエストサイド商會主たる川野吾八が、第二世青年をして、日本精神を把握せしむるには、日本劍道に據る外なしと看破し、自ら音頭取りとなり、數組の劍道々具と拾數本の竹刀を寄贈し、幸ひ同地に在る劍士佐野繁を招聘して、大に劍道を奬勵せしめたのに始まる。而して其後の成績を觀ると、極めて良好に進んで行く處から、川野、佐野の兩名は、之れを青年會に圖り、大擧的に武道奬勵を圖らんとしたが、まだ其の機運に至らず、僅かに餘喘を保つて繼續するに止ゞまつて居た折柄、昭和八年晩春、中村藤吉教士一行が來講するに及び、時機到來せりと見て父兄の吉原佐一郎、佐野繁、尾形正、酒井金一、山口正義、池宗長吉、長谷鶴松、海老原等と語らひ、積極的共鳴を得て力を得、多數の青年男女を勸誘して、中村教士の劍道講習を受けさせた結果、非常な好成績を擧げた處から之れを永久に保存せん爲、昭和八年六月貳日、北米武德會デラノ支部を創立するに至つた。